長崎の電話

田中貢太郎

京都西陣（にしじん）の某と云う商店の主人は、遅い昼飯（ひるめし）を喫（く）って店の帳場（ちょうば）に坐っていると電話のベルが鳴った。主人は己（じぶん）で起（た）って電話口へ出てみると聞き覚えのある声で、

「あなたは——ですか」

と云ってこちらの名前を聞くので、

「そうです、あなたはどなたです」

と聞くと、

「わたしは〇〇です」

と云った。それは主人の弟で支那（しな）へ往っているものであった。主人は喜んで、

「お前は帰ったのか」

と云って聞くと、弟は、

「わたしは病気になって、今、長崎の——旅館へやっと帰ったところです、兄さんに、是非(ぜひ)会いたいから、どうかすぐ来てください」

と云ったかと思うと電話は断(き)れてしまった。主人は病気の模様を聞きたいと思ったが、電話が断(き)れたので残念でたまらなかった。しかし、病気ですぐ会いたいと云うからには、すぐ往ってやらなくてはいけないだろうと思って、電話口を放(はな)れたところで、番頭の顔が見つかったので、

「支那(しな)へ往ってた弟が、病気で長崎まで帰って、すぐ来てくれって電話がかかって来たから、これから往って来る、後(あと)をよく気を注(つ)けてくれ」

と云った。すると番頭が変な顔をして主人の顔を見返した。

「長崎へ電話が通じておりますか」

その時は明治四十三年の八月比(ごろ)のことで、長崎への長距離電話は無論なかった。主人は気が注いて電話局へ問(とい)あわしてみた。果(はた)して長距離の電話もなければ、今電話をつないだこともないと云った。主人はますます不思議に思ったが、そのままにしてもおけないので、

とにかく長崎へ往くことにして、その日の汽車で出発して長崎へ往き、怪しい声が云ったその――旅館と云うのへ往ってみると、病（やまい）をおして支那から帰って来ていた弟は、兄の往くのを待たないで病死していた。後で詮議（せんぎ）をしてみると、電話のかかって来た時は弟が息を引きとった時であった。この話は明治四十三年十月、田島金次郎翁（おう）がその時京都にいた喜多村緑郎（ろくろう）氏を訪問した際に、その席上にいあわしていた医師某が、真面目な知人の話だと云って話した話である。

底本：「伝奇ノ匣6　田中貢太郎日本怪談事典」学研M文庫、学習研究社
　　２００３（平成15）年10月22日初版発行
底本の親本：「日本怪談全集」改造社
　　１９３４（昭和９）年
入力：Hiroshi_O
校正：noriko saito
２０１０年10月20日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫(http://www.aozora.gr.jp/)で作られました。入力、

校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。